

平成 24 年度

事業所名 : あお空グループホーム釜石

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391100047		
法人名	有限会社 介護施設あお空		
事業所名	あお空グループホーム釜石		
所在地	釜石市片岸町2-13-28		
自己評価作成日	平成 25年 3月 5日	評価結果市町村受理日	平成 25年 6月 10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/03/index.php?action_kouhyou_detail_2012_022_kani=true&JigyosyoCd=0391100047-00&PrefCd=03&VersionCd=02
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号
訪問調査日	平成 25年 3月 22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

指示される前に自分から気づき行動する姿勢を評価し、ミス責めことなく 自主性を成長させて行く方針で行っています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は開設3年目を迎えたが、小規模多機能ホーム、サービス付き高齢者向け賃貸住宅と屋根続きで併設され、リビングを併用するなど一体的な運営になっている。震災後、小規模多機能ホームには泊まりを継続する利用者が増え、また、グループホームには市の要請で単身の利用者が増えている。日常的に利用者の交流が自然に行われており、職員は施設種別による生活単位を基本としながらも、種別の違いをあまり意識せずにケアにあたっている。震災により地域のコミュニティが壊れ、再構築中の現在、利用者の出身地が事業所所在地に限らず広範囲に亘っており、地元との関係が希薄になる傾向にあるが、制度上の地域密着型施設として近隣地域との交流に向け取り組みを始めようとしており、高齢者を中心とした交流の核になっていくことが期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

事業所名 : あお空グループホーム釜石

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	新規採用時に企業理念の趣旨説明をし目につきやすい場所に掲示している	「敬意・暖かいサービス・尊厳」をキーワードにした経営母体の理念のもと、職員の研鑽・思いやり・地域交流の実践など4つの方針を共有し、確認し合いながら、職員間に壁がなく、仲間意識を持って楽しく働くことがサービスの質向上にも繋がるとの考えのもとでケアにあたっている。	会社の理念、方針を実践場面で具体化していくために、グループホームとしての運営方針なり、目標なりを主体的に設定することも、ケアに向けた職員の一体感を一層増すものと一緒に考える。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	交流の働きかけをしている。	震災後の復興がままならない中、保育園児たちや、町内の伝統芸能虎舞が来訪してくれたり、更に野球少年団が野菜を届けたりと、地域との繋がりが戻りつつある。なお、町内会や婦人会など、地域活動の母体が再構築され、近隣地域との交流が活発化されることを期待しているとしている。	事業所の行事やイベントに近隣地域の皆さんを招待し、震災後の地域交流復活のきっかけづくりを検討しており、大いに期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症の介護をしている家族に「あゆむ会」の入会案内をして社会資源の活用や介護負担軽減に役立つよう働きかけている。施設見学の受け入れもしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営状態、問題点など明らかにしている。	震災後、運営推進会議の開催を遠慮していたが、平成25年2月に本年度2回目を開催した。委員から回数を増やした方がよいとの意見が出され、今後は適時に開催することとしている。震災時の避難場所になっている駐車場への街灯設置や発電機の設置を委員からの提言をもとに環境整備を行政にお願いしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	包括支援センターや福祉事務所との連携の勤めている。	震災の際の避難所となったことから、市からは単身の利用者依頼が増えるなど、連絡・連携の機会が増えるようになってきている。市の担当者が運営推進会議の委員になっており、運営状況等をきちんと把握してもらっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	常に意識の対象としており、拘束は行われていない。	管理者が講師になって拘束や虐待に関する勉強会を開き、共通認識を持つよう努めている。また、日常の会話でも浜特有の言葉遣いや命令口調に気をつけるなど、親しみを込めた言い回しなどで対応している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日常業務の中で介護者の言動に留意し強いストレスを受け逆転移		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	必要に応じて対処できる体制はできている。また成年後見制度、権利擁護の活用の利用も促している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用後のトラブルにならないよう説明と理解に努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	年度末に家族及び利用者よりサービスに関するアンケートの実施を予定	利用者は単身者のほか、家族がいても遠隔地が多いことから、家族とは電話での連絡が主であるが、その中で要望等を確認している。また、家族アンケートを通じて意見、要望を把握することとしており、要望等は職員会議で話し合い、運営に反映するよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々のミーティングを活用して管理者や会社役員に上申している。	日々のミーティング時を利用し、職員の当番制としたリーダーのもとでテーマをリーダーが決めて話し合いを先導する仕組みとし、例えばノロウィルス感染の事後措置や発生予防の対策を集中議論をし理解を深めている。更に運営母体の専務が時折来訪し、職員とも話す機会を持ち意向反映に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	福利厚生改善のため努力している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の研修の機会はできるだけもうけて参加できるよう指示を受けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市内事業所と連携し協力している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	生活環境が変わる人の心理状態は期待よりも不安が大きくサービスに関わる上で重要なポイントになるので特に注意をはらう必要があると考えている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人、家族間の調整が必要な時が多く意志確認は不可欠であり、時には時間と労力がかかる。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	サービスにあたり当事者間の力量分析は重要であり他の資源の活用も留意し日頃より情報の収集に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家族に代わり介護しているため時には複雑な事案に巻き込まれるケースもあるが、ケースワークの原則の立ち帰り、本人との関係構築に努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族との協力関係なしに一方的な支援は困難であり、事業所がもっとも望んでいることである。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	これまで地域で培ってきた方々との関係を継続できるよう支援する事は本人のとっても貴重な社会資源として重要視している。	地域での友人・知人、社会活動での繋がりを大切に希望に添った支援に努めている。馴染みとなった美容院には極力継続利用するようにしている。新しい馴染みづくりは震災後で難しい面もあるが、外出の機会を多くつくり、新しい出会いの機会をつくるよう努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	個人としての空間と集団との関わりにメリハリとつけられるようハード面、ソフト面で配慮している		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	必要があれば取り組むが現在の所必要とする場面はない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意向は常に聴いてその意向に添えられるよう検討努力している。	日々のケアの中で、何気ないつぶやきや会話、行動、表情などから思いや意向を把握し、連絡ノートに整理し職員間で共有しながら支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族と協議しニーズの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の生活の中で常に見守り、介助を行うなかで対処している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ケアプラン作成から評価まで一連の流れを全員の職員で管理するまでには至っていない。	震災後、全員で介護計画を検証する時間がなかなか持てなかったが、昨年末から職員の介護計画作成能力の向上を含め、実施状況について職員会議でモニタリングなどの評価を行い、各担当者に計画の見直し、変更等の案を作成している。その上でケアマネージャーが家族等と調整し、現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員間の情報共有は少しずつ改善されている		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	既存のサービス枠の概念に縛られることなく少しずつ対応能力をあげなければならないとおもっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	児童、学校機関、地域の文化交流は今後も継続して行く予定である		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族、本人の希望する診療所、病院への通院等の支援を行っている。	医療受診は原則家族対応としているが独居者や遠距離家族が多いため、看護師が同行支援し医療機関との連携を適切に行なっている。訪問診療の利用も多くなっているほか、看護師は一人ひとりの受診状況を管理し結果は必要に応じ家族に連絡している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	健康管理、医療機関との連携、予防に日々努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	医療相談室、主治医、看護師と連携して対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人ないし家族と今後の方向性について協議し医療機関との連携を取っている。	重度化は、医療を必要としない限り対応することし、終末期は、家族の希望に沿って医療機関との連携を取りながら支援を行うことを基本としているが、単身者も多いことから、状況によっては、事業所での看取りも想定され、その場合の対応について職員間での話し合いを始めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	機会をもうけて順次研修を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害による停電、断水等に備えて物資の備えを検討して少しずつそろえている。	震災のため昨年度は実施出来なかった火災避難訓練を小規模多機能ホームと合同で実施している。また消防署の指導で救命救急の訓練も行ったほか、非常食等備蓄を行っている。今後は近隣地域の方々を事業所のイベントに招待するなどしながら繋がりを強め、災害等で協力し合える関係を築くための取り組みを進めたいとしている。	特に夜間の災害を想定し職員の通報緊急招集や近隣住民の協力体制の確立を期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	尊重の意味を理解して丁寧な声掛けを心掛けている。	本人の気持ちを第一に考え、さり気ない支援を行うことを基本に、一人ひとりのプライバシーを守ることを徹底している。入浴時のプライバシー確保のため脱衣室にカーテンを設置し安心感を与える改善を図るなど、利用者の立場に立って気配りをしながらケアにあたっている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々のコミュニケーションの中で思いや希望をきいている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日に行いたいことは自己決定してもらい利用者様のペースで過ごして頂いている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	着衣を選ぶ際、利用者様に自己決定してもらい利用者様の意見を尊重している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の行事食などを取り入れて提供したり、バイキングなどを行い楽しんで頂いている。	献立は利用者の好みや季節感に配慮し、郷土食や行事の際の特別メニュー、バイキング等を取り入れ変化を演出している。一部冷凍食品やチルド食品を利用しているが、メインは手作り料理としている。利用者の中には野菜洗いやテーブル拭き、食器洗い等の手伝いや役割を担っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	希望に応じて小盛りや大盛りなど栄養バランス内で調整している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔清拭の声掛けや一部介助を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排尿パターンを把握し声掛けや一部介助にて行っている。	一部介助を必要とする利用者もいるが、一人ひとりの排泄パターンを把握し事前の声がけで排泄を促すことで、全員がトイレで排泄しており利用者が自信を持つ支援をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便記録をとり適度な運動や水分補給を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	曜日を決めているが体調、気分に合わせて日時を調整している。	広い浴室にステンレス、ひのき、障害者用と、利用者の容態や希望に応じて利用できる三つの浴槽があり、ひのき風呂が大人気で、職員との会話も弾む。週2回、午前、午後どちらでも希望により入浴してもらっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中においても自由に居室で休まれている。夜間も完全消灯を設けず状況に応じて対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬内容をカルテにはさみ常に状況の変化に対応できる様にしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食事前のテーブル拭きや下膳、洗濯、掃除など出来ることを範囲内で行って頂いている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	対応出来るものはその日に行い、出来ないものは承諾を取り日を改めて対応している。	墓参や買い物(大槌町マスト、薬王堂等)など外出の機会を多くするようにしている。隣接する駐車場の桜が見事でお花見が恒例になっている。また敷地の隣が梅林になっており、地主さんの協力を得て花見を楽しんだり、梅の実をいただいたりしている。小規模多機能ホームと合同でドライブの出掛けるのも楽しみの一つになっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の能力を見極めて所持管理させている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	施設の電話や携帯にて必要に応じて支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホールは季節により装飾を変えている。その他温度管理も空調にて過ごしやすい温度に保っている。	立地する高台から見下ろす街は震災の爪痕が残り、痛々しい風景であるが、陽光が入り、小規模多機能ホームと共用のリビングは広く、利用者は大きめのテーブルにゆったりとくつろいでいる。利用者が製作した版画(若い頃はコンクールに入選したレベルの高いもの)や季節の花や鉢が置かれ、やわらかで和やかな雰囲気のあるリビングになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ハード面(建物構造)は十分なスペースを確保している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は本人の趣味・趣向を聞き出来るだけ取り入れている。	備え付けのタンスの他、小ぶりの収納ボックスを置き、整理の行き届いた明るく清潔感のある居室である。家族写真や自作の作品、趣味の飾り物などが置かれ、夫々個性のある生活領域となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ホール、トイレ、キッチンには広さを保ち安全に過ごしている。		